

梶原町を訪れて思うこと

昨年12月に、地域活性化の取り組みで名高い高知県梶原町^{ゆすはら}を初めて訪れる機会を得た。美しい自然の中で保持されている棚田の景観には厳かともいえる存在感を感じさせられた。また、高名な民宿ではおかみさんや町の皆さんとともに、囲炉裏を囲んで美味しい食事と楽しい懇談のくつろぎの時間を頂けた。更に、山間の狭い夜空にきらめく星を久しぶりに堪能し、今年のブームを先取りした「坂本竜馬脱藩の道」を巡るなど予期せぬ楽しみにも浸ることができた。一泊二日の短い滞在であったが、この町の総合的な地域力のようなもの、即ち独自の「資源」、「歴史・伝統」などを大事にしながら、「人々」がそれを活かしつつ地域活性化に結びつける姿勢とその成果、に深い感銘を受けたところである。

都市・農村交流やグリーン・ツーリズムの旗印のもと、梶原町に限らず全国各地で、土地の自然や文化を土台にしつつ、来訪者にも楽しんでもらえる地域づくりが進められ、関係者の工夫、努力による実績が挙げられてきた。一方で、これらの地域が都市住民を含め国民各層にひろく活用されているかといえ、そこはまだ十分ではない。地方からすればせっかく整備した有用資源が活かされず、都市側からすればせっかくの楽しみの機会をみすみす逃しており、国民経済的見地からも「もったいない」といえる状況ではないか。

また、社会、経済が活気づく基本は「人の存在」であり、このところの重要課題である内需、とりわけ地方での内需の拡大という観点からも、最終消費者である「人」が多く地域に存在し、消費活動することによって、地域内で経済が循環し、地場産業の振興や雇用の拡大に結び付くことが望ましい。地域の産品に付加価値を付けて都市部に出荷することも大事であるが、それを更に一歩進めて地場に来て消費してもらおう機会を拡大できれば一層効果が上がる。都市側からしても、流通網に乗って全国から集められる多様な産品だけでなく、時には自ら出向いて地場の新鮮さに触れる楽しみがもっと多くあって良いはずである。

都市部に集中している人々を田舎に呼び込むことができるよう、「地方での定住(移住)」、「二地域居住」、「交流」など様々な取り組みが行われている。昨年秋に久々の大学の同級会に出席したところ、同級生の一人が退職後の農村移住を準備中で、その行き先が私の出身地信州の隣村であることがわかり、驚きとともに嬉しさを感じた。明らかに、国民のライフスタイル面で自然や田舎を重視する動きが強まりつつあるといえる。ただ、都市部に立脚した産業構造や人口減少の時代を迎えている中で、地方で定住人口の増大を求めるのは容易ではない。また、定年を迎えた時間的ゆとりのある世代だけでなく、働き手世代や子どもたちを含め多くの国民に取り組んでもらえるという意味ではやはり「交流」方式の活用であり、手軽にかつりピーター的に田舎を訪問できる環境づくりが必要とされよう。

仕事から離れて農村地域での余暇を楽しむには、「時間」と「費用」の余裕が前提となる。「時間」についていえば、多忙な働き手世代には先ず有給休暇などを機動的に活用できる条件整備が必要であろうし、たまの休みに道路の大渋滞や列車の大混雑を思い浮かべるだけで意気阻喪することの無いようにレジャー機会の分散化も必要である。また、費用についていえば、高速道路や鉄道の料金、ガソリン代などのコストが軽減されることは大きな効果と呼ぼう。

このところ、長期休暇を地域分散的にとってはどうかとか、高速道路の無料化や軽減の論議などが進められている。既存のシステムを変える際には経済活動への影響など様々な課題を十分に吟味してこれをクリアーする必要があるが、都市・農村交流の立場からみて余暇活動の促進につながる利点があれば、従来の枠にとらわれず新しい発想で可能性を見出していくこと自体は望ましいものといえる。国内の各地とりわけ田舎と都市の間で人の往来が活発化、恒常化することは様々な面でプラスの効果をもたらす。「都市から田舎へ人を呼び込む」とのコンセプトで、これに必要な時間、費用についての制約を緩和し、来訪者数の増加と平準化につなげていける方策が見出せないものだろうか。

((株)農林中金総合研究所 顧問 小林芳雄・こばやしよしお)